

植物民俗にみる地域差

— 樹種選定と植生 —

篠原 徹

はじめに

- 一 植物民俗の比較の前提
 - 二 ナラ林のムラ・カン林のムラ
 - 三 樹種選定と植生
- おわりに

論文要旨

民俗の生成・発展・伝播をなうムラを単位にして、そうしたものが重合し複雑な民俗の地域性を作りあげている。この地域性を植物に関わる民俗という側面から考察するとどのようなことが基本的な問題になるのであるか。ここではそのため単位となるムラのなかで何をどのように調査し、そしてどう比較していくのか基本的なことを抽出してみた。それは地域差を抽出する基礎作業であるが、まず植物生態学的に妥当な列島の環境区分をおこない、その区分のなかで野生植物利用体系という点から伝統的生活様式が同じように区分できるかどうかをまず調査する必要性を強調した。そのため環境区分としてカン林のムラとナラ林のムラをとりあげ、生活様式とかわりの深い植物利用体系がどのように異なっているかを抽出してみた。それは当該地域の本来の自然植生の二次林に適応した利用体系が存在することを意味している。それぞれの地域で生活様式と同等な関係をもつ植物の素材を同位素材と提唱し、その同位素材を

分析手段として逆に環境と生活の類型化を今後考えていこうとするものである。こうした同位素材と生活とのかかわりをみていくことは、いままで植物民俗が民俗の起原論や伝播論の都合のいい材料として使われてきたことに對して別の視角を提供する可能性を示唆している。それは植物民俗の研究においても福田アジオのいう「個別分析法」と同様な立場にまず立たねばならないこと的主張である。柳田国男は「鳥柴考要領」でクロモジが遙か古代にはサカキに先行する神に捧げる「香をかくわしむ」植物と想定しているが、民族起原論への限り無き憧れを内に秘めた議論を展開する前に植物民俗と伝統的生活様式との実証的な関係を知らねばならない。そうした地域差の抽出の先に分布・伝播に關する手掛かりがあるのではないか。植物民俗の研究はその意味では極めて初歩的な位置にあることを確認する必要がある。